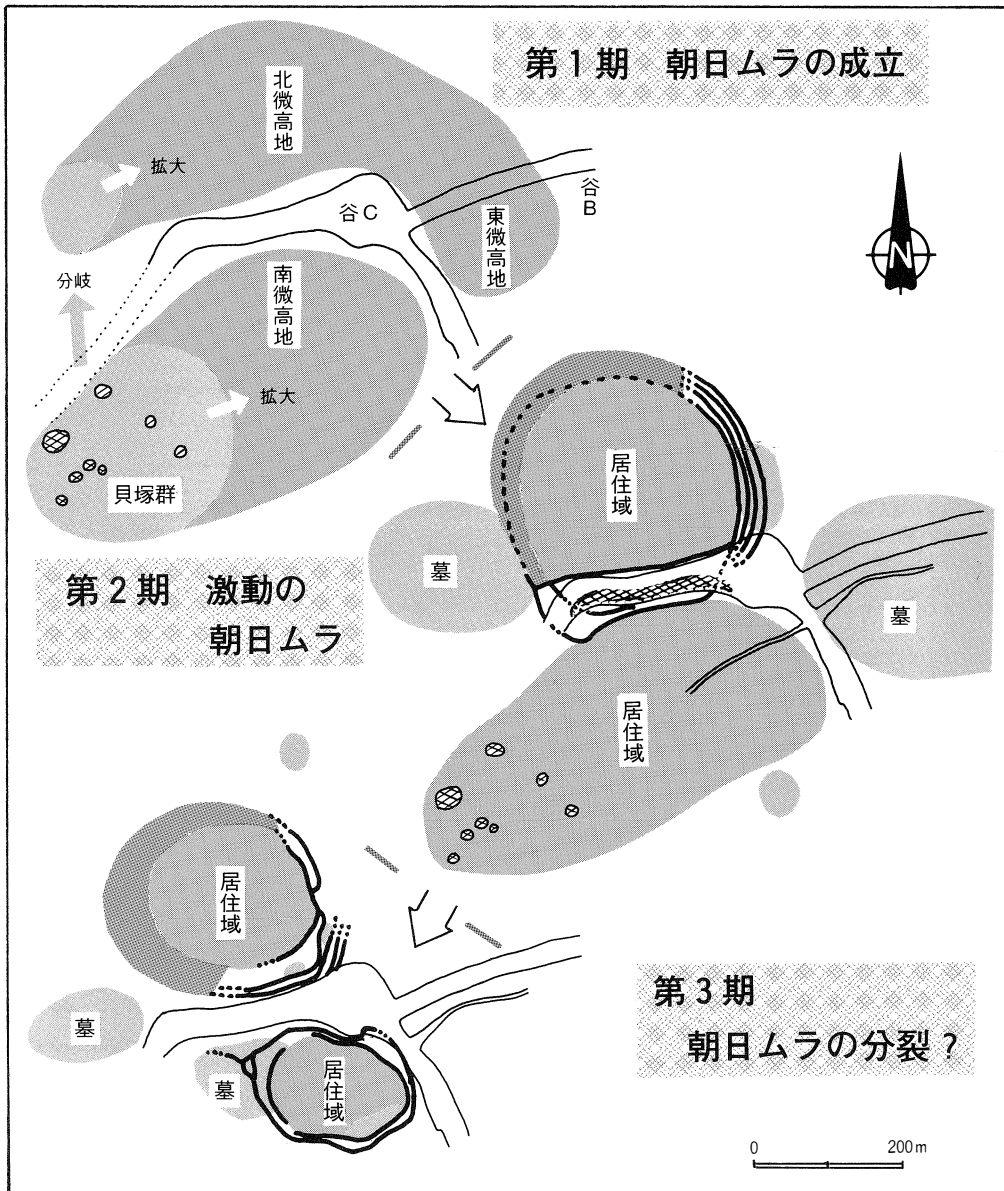


埋蔵文化財 愛知

No. 8



朝日遺跡の変遷

(2～3ページに関連記事記載)

シリーズ朝日遺跡を語る

朝日遺跡の変遷と特質

はじめに

朝日遺跡(以下「朝日ムラ」と呼ぶ。)は、居住域・墓域だけで推定面積70~80万㎡という広大さを誇っており、未だ確証の得られていない水田・畑を含めた面積は想像を絶するものがある。

居住域、墓域は谷B、Cに分割された南・北・東の各微高地に展開し、第1期から第3期までの変遷を辿ることができる。以下においてはこの3期区分によって朝日ムラの変遷を概観し、その特質を素描してみたい。

第1期 (弥生時代前期~中期初頭)

南微高地南西部に貝殻山貝塚を始めとする貝塚群を形成する。貝塚群はほぼ環状に位置しているが、住居群との関係は不明である。いずれも大規模な貝塚(貝殻山貝塚:径15m厚さ2.5m、二反地貝塚:径25m厚さ1.5m)であり、これらが単なる食料残滓の集積とは思われない。縄文時代の大型貝塚にも匹敵する点は、それらが海産物加工によるものであることを暗示する。特に、朝日ムラ構成員が西方からの流入者を中心としていることを考えれば、生活に不可欠な道具である石器の入手・生産や動物性食料の獲得にあたって、既に当地にいた縄文系住民と接触を持たざるを得なかったはずであり、その交流をスムーズに進めるための物資として海産物加工品が生産されたと考える。朝日ムラで使われている石器や土器に縄文系のもがみられることは、交流の活発さを物語っている。

貝殻山貝塚周辺の貝塚群地区は、居住域と生産域として成立したが、弥生時代前期の後半になると北微高地西部に新たに居住域が設定され、居住域のみの地区と居住域と生産域の地区に分化する。そして第1期の終わりには、居住域は南・北微高地の全体、東微高地の一部にまで拡大する。そのなかで南微高地は居住域と生産域の地区として固定され、第2期に継承される。

第2期 (弥生時代中期前葉~中期後葉)

第1期の終わり(弥生時代中期初頭)に広範囲に拡大した居住域は北微高地に設置された環

濠内に主に限定されるようになる。すなわち朝日ムラの<囲郭集落>化である。この<囲郭集落>は、多くの人々が一か所に集中して住む<集住>を前提として、その居住域の周囲に溝・土塁・柵などの防禦施設を巡らした集落であり、第2期の終わり(弥生時代中期末葉)にも形成される。

朝日ムラでは<集住>という居住域の集中化によって空白となった跡地が墓域と化し、方形周溝墓、土塚墓などがつくられる。特に北微高地西部と東微高地の居住域跡地は第2期における墓域の基幹をなす。

東・西の墓域は構成内容が大きく異なっている。東墓域は方形周溝墓からなり、大は一辺35m、小は一辺3~4mと規模較差が目立つ。それに対し西墓域は方形周溝墓、土塚墓、土器棺墓からなり、大は一辺12m、小は一辺3~4mと規模較差は小さい。しかも、東墓域ではおおむねAランク:1辺の大きさ(以下同じ)18~35m、Bランク:12~16m、Cランク:10m以下という段階区分が可能であり、概してAの1/2がB、Bの1/2がCという傾向が窺える。つまり東墓域は一定の規格差による階層からなるピラミッド型構成をなすのであり、それに対し、西墓域は東墓域のCランク相当のみに限られるのである。

墓域の東西区分は墓域占有集団の違いであり、構成上の相違は集団構成の差に対応するものである。居住域と対応させるなら、大型方形周溝墓に象徴される東墓域占有集団は北微高地の環濠内において常時住居ともども保護される集団であり、西墓域占有集団は南微高地に住居を構え生産に携っている集団ということになる。従って後者は社会的緊張が高まれば自らの住居を放棄して北微高地環濠内に逃げ込まなければならなかったであろう。

つまり、朝日ムラ構成員は、大型方形周溝墓に象徴される有力者とそれにつらなる集団、「玉作」などの特殊品生産者、日常的に労働を

行う一般生産者という区分からなり、前二者が環濠内に常時居住し、一般生産者は環濠内外にまたがって居住していたということになる。こうした階層分化は、すでに述べたように第1期に端緒がみられるものの、その進行、固定化はやはり<囲郭集落>の形成によって促進されたものと考えられる。すなわち環濠の造成、内部居住空間の整備およびこうした労働の指揮、また外圧に対抗するための内部固めとしての組織上の整備などにおいて指導的役割を果たした階層の有効化は十分あり得る。見方を変えれば、指導力の強化による指導者(層)の有効化が集団構成上のピラミッド化をもたらしたとも言える。

ところで、朝日ムラの第2期を特徴づけるのは何とんでもなく<囲郭集落>の厳重な構造である。特に第2期終末のものは、内側から大溝1条、〔柵+逆茂木〕2列、杭群のバリケード1列というように他に例をみないものである。朝日ムラにおいてこれほどまでに守らなければならなかったものは一体何であったのか、大型方形周溝墓に象徴される何かがあったはずである。

第3期 (弥生時代中期末葉～後期)

第3期の第2期と異なる点はまず墓域にあらわれる。第2期は東・西の墓域とも重複関係もなく、一応順調に展開していたが、第3期になると東墓域はほぼ造墓活動を停止し、西墓域では第2期の墓域を否定するかのよう造墓活動が行われる。そして新たに南微高地北端に墓域が設定される。

ここで重要なことは西墓域における先行する方形周溝墓群との断絶である。東墓域に典型的にみられるように、墓同士の接触はせいぜい周溝までに限定され、直接墳丘を切り合うことは第2期にはほとんど見られなかったから、それが弥生時代中期末葉をもって始まることは、朝日ムラの統合原理に変化が生じたことを示すものと考えられる。実際、諸々の点において変化している。

例えば、方形周溝墓は、大型方形周溝墓及び四隅の切れる形態が消滅する。溝断面は逆台形からV字形へと変化する。埋葬主体は単葬から

多葬となる。供献土器は限定器種の少量供献から、諸器種の大量供献となる。住居は円形竪穴住居が消滅し、すべて隅円方形竪穴住居となる。土器は伝統固有のものがほとんどなくなり、大きく形を変える。製作技法、施文技法も大きく変化する。というようにである。中期以来継承している点を求めれば、南居住域北縁での貝層形成と台付甕以外には思い浮かばない程である。第2期最後の<囲郭集落>が柵・逆茂木・大溝で厳重に防禦されていた直後の変化としてはあまりにも大きな落差があると言わざるを得ないのであり、そこに果たして朝日ムラとしての連続性を認めることができるのか、いささか問題となるところである。

上記のような大きな画期を経て第3期は南・北両微高地に環濠の形成をみるが、このような画期を経た後の両居住域がそれぞれ個別のムラとして機能しているのか、あるいは両者でひとつなのかは議論のわかれるところであろう。谷C(この時期は河道化している)を挟んでいるとはいえ、目と鼻の先にある両者が全く別々の動きをしていたとは考え難いから、第2期の大型方形周溝墓の存在に象徴される強い統合ではないにしても、両者で朝日ムラを構成していたと考える。なお、弥生時代後期以降は貝塚形成も貧弱になるが、これと対照的に名古屋台地では活発な貝塚形成をみることができる。恐らく尾張平野部におけるムラ統合の広域化のなかで、平野部の沖積化の進行もあいまって、朝日ムラの役割が他へ移った結果であろう。この時期に朝日ムラにおいて銅鐸等の金属器生産が行われていたことを推定するに足る手懸りの存在も、そうした広域統合に伴うムラごとの機能分化の一環かもしれない。

おわりに

朝日遺跡の調査は現在も継続中であり、日々新しい情報を我々に与えている。それは上記の変遷をより詳しいものにするかもしれないし、あるいは覆えすことになるかもしれない。いずれにしても課題は多い。今やっと朝日ムラ解明の緒についたところと言えよう。

(石黒立人)

市町村日より

七曲古窯址群

知多市教育委員会

七曲古窯址群は、知多市の東部丘陵に造成中の運動公園の八幡池下91-1に所在するA群7基と、隣接の七曲4-90の山林にあるB群3基の10基からなり、昭和60・61年と継続して発掘した。A7号窯は築窯したのみで使っていないが、A-1.5.6の3基は山茶碗・山皿の窯であり、他の6基は甕の窯であった。そして年代はA1号のみが13世紀初頭にのぼり、他はいずれも14・15世紀に比定されている。A-3.4号窯からは壺や甕の完形品をはじめ、多彩な押印文様がみられ、中でも前庭部からは流通品とは異なる民族儀礼の浄水碗じようすいわんが出土している。これは窯屋が火入れ・窯出しをするにあたり、窯を清めるための水を入れる容器として使用したと考えられるもので、密教法具を模して自家用につくり、器面に縦位の線彫りを施している。窯

構造でも全長が17mもあるB1号窯では、分炎柱の背後にもう1本の支柱を検出するなどの成果もあったが、とくにA1号窯では燃烧室が完全にのこり、焼成室前部へつづいて約2mも窯の天井部が遺存していた。燃烧室の奥で分炎柱や分炎孔の上部に約50cmも焼けた障壁がみられ、焼成室に入ると床面の上に粒子のこまかい粘土を貼り、やや大形の馬爪形焼台をすえ、山茶碗を重ね焼きしている。知多市では運動公園の公開の時期にあわせA1号窯を、上屋を建て樹脂加工など永久保存の方策をすすめている。

(知多市民俗資料館 館長 杉崎 章)



天神遺跡

——昭和61年度の調査——

知立市教育委員会

本遺跡を含む西中遺跡群は、猿渡河左岸の洪積台地舌状部に立地する。今回報告する天神遺跡B地区の調査は、昨年度に引き続き行われたもので、調査総面積は合計1500㎡となった。

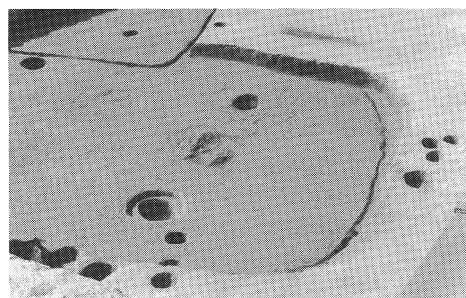
調査の結果、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡2棟、土器棺墓1基の他、溝状遺構、土坑、ピット等多数を検出した。

竪穴住居跡は、弥生時代中期後半と古墳時代前期及び中期に属する。特に5軒検出された弥生時代中期後半の住居跡は、これまで西三河部においては検出例がほとんどなく、今回の調査でその全体像が明らかになった。また出土した土器群は、従来まで「古井式」「長床式」と呼ばれてきた両者から成っており、尾張部において確認された〈在来系〉土器と〈畿内系〉土器との共存が、本遺跡においても確認できた。一

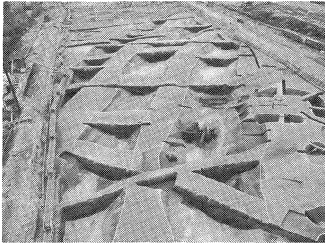
方、今年度新たに検出された土器棺墓は、檜王式の壺形土器を用いたもので、このことから、縄文時代終末から弥生時代への移行期に、既に人々がこの地で生活を営んでいたことが明らかとなった。また中世の土坑からは、完形の山茶碗、小皿と共に鉄刀が出土し、その出土状態等から墓としての可能性が考えられる。

このように、今回の調査によって検出された遺溝・遺物には、これまでの研究において問題とされていることが多い。今後の整理作業を通じて、これらの問題の糸口をつかんでいきたい。

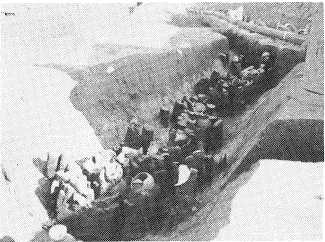
(社会教育課主事補 岡本茂史)



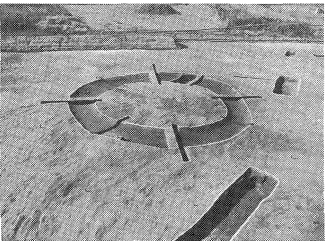
発 掘 ニ ュ ー ス

**朝日遺跡（E区・F区・G区）**

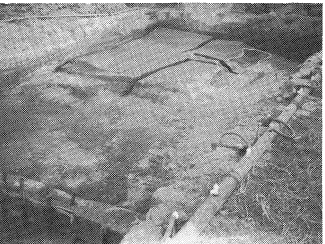
朝日遺跡H区・I区に検出された旧河道の北側に位置する。E区・F区では北部居住域に伴う弥生時代中期の環濠2条の中から朝日遺跡A区・B区から連なると見られる逆茂木を検出。G区では北居住域に伴う弥生時代中期の環濠3条と弥生時代後期の環濠1条を検出。

**朝日遺跡（H区・I区）**

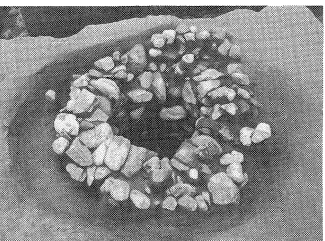
両区において弥生時代後期の旧河道を検出。H区では発掘区南側に南居住域に伴う弥生時代後期の環濠2条を検出。何れも廃棄された土器多数が含まれていた。I区では発掘区北端に弥生時代後期の溝2条、南側に南居住域に伴う弥生時代後期の環濠1条を検出。

**朝日遺跡（J区・K区・L区）**

この3区は旧河道の南に位置し、J区ではH区から東に続く環濠を検出。J区・K区にまたがって古墳時代中期の円墳1基を検出。この円墳のすぐ西には県史跡の検見塚があり、これとの関係が注目される。L区南端では弥生時代後期の方形周溝墓2基を確認。うち1基は東側の辺中央において周溝が切れる。

**大淵遺跡**

谷地形（旧河道か？）中の包含層から、弥生時代中期～戦国時代にかけての遺物が多量出土。本調査区は従来から調査を進めてきた『大淵遺跡』の広がりにおいてその北端に位置する。

**清洲城下町遺跡（五条川改修関連）（D区）**

16世紀末～17世紀初頭にかけての南北に走る溝4条を検出。方形（8m×5m）の池状の遺溝（滞水状況が認められる）を検出。他に石組井戸1基を検出したが、これは17世紀初頭のもものと思われ、城下町遺跡、朝日西遺跡を含めて初めての例である。遺物としては瀬戸・美濃系の天目茶碗、皿などの他に竜の頭を模したと思われる木製品（幅4cm、厚さ1.5cm、長さ15cm）なども見られる。

建設すすむ愛知県埋蔵文化財調査センター

昭和30年代後半に始まる高度経済成長期の中で、いたる所で開発事業がおこなわれ、旧来の景観とともに数多くの遺跡が姿を消していったことは、周知のとおりである。このため、開発事業と埋蔵文化財保護の調整が急務となり、昭和40年代中頃より、各開発部局と文化庁の間で調整に関する覚書がとりかわされ、また昭和50年には文化財保護法的大幅改正がおこなわれるに至り、これらの措置によって、埋蔵文化財保護の一応のシステムが定まったのである。

しかし、その後の開発事業の増加、さらには法改正に伴う諸手続きの整備は、緊急発掘調査件数の急増という皮肉な現象をもたらしたのである。この皮肉な現象に対処するためには、専門職員の増員とともに、調査の核となる施設の充実・整備がはからなければならないことはいうまでもない。このため、文化庁は昭和54年に「埋蔵文化財調査センター建設費補助要項」を設け、地方自治体による公立の調査センター建設の促進をはかったのである。

※ ※

昭和60年度に発足した財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、本誌でもその都度紹介がされているように、東海地方の代表的な弥生集落の実像をあらわしつつある朝日遺跡、織豊体制下の城郭形態が注目されている清洲城下町遺跡などで、発掘調査を継続している。これらの発掘調査によって発見された遺物は膨大な量にのぼり、その保存・活用をはかるための恒久的な施設の建設が望まれていたのである。幸いにも愛知県が計画した調査センター建設は、上記の国庫補助事業に採択され、昭和60年度に海部郡弥富町前ヶ須新田地内に用地を購入し、基本設計、地質調査および実施設計が委託実施されている。本体工事は、昭和61年7月に着工し、本年9月竣工、同12月開所を目指している。建設規模は、コンクリート3階建、延床面積約4000㎡であり、施設としては、1階に荷解室、水洗・乾燥室、

愛知県教育委員会文化財課

遺物整理室など、2階に特別収蔵庫、資料管理閲覧室、図書室など、さらに3階に収蔵庫、図面・遺物整理室、保存科学処理室などがおかれることになっている。



完成予想パース

この調査センターがおこなう事業としては、まず、学術発掘調査、遺跡範囲確認調査、出土品に関する研究および報告書の作成があげられる。また、文献・報告書等の収集、出土品の整理・保管、保存処理があげられる。さらに、出土品の合理的収納方法やデータ・ベース化への検討も必要となろう。一方、発掘調査に関する市町村担当職員などへの個別的指導や研修会の実施、さらに講演会・展示会の実施、機関誌・紙の発行などの普及活動も、調査センターの事業としてあげられる。

このように、調査センターは、調査研究や保存といったハードな面と、指導・研修や普及啓発といったソフトな面での活発な活動が期待されている。

なお、財団法人愛知県埋蔵文化財センターもこの調査センター内で業務をおこなうこととなるが、財団法人センター、調査センターおよび文化財課の三者が連携することによって、愛知県の埋蔵文化財保護の歩みが一層着実なものになることを念じている。

資料紹介

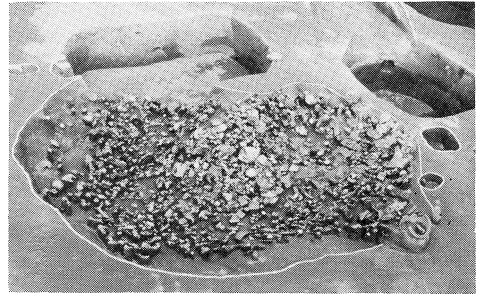
清洲城下町遺跡の廃棄土坑

廃棄土坑が検出された61B区は、清洲町清洲に位置し、五条川沿いの住宅密集地である。当地点の発掘調査は五条川河川改修工事に伴い、昭和61年8月から本センターで実施した。遺跡は中世末期から近世初頭の清洲城下町とそれ以降の清洲宿関連である。

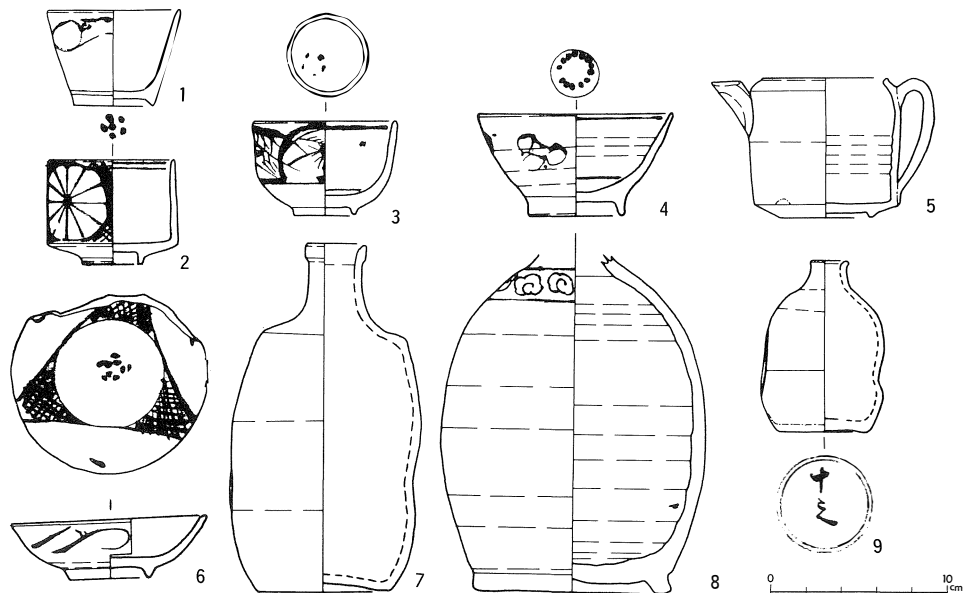
廃棄土坑は、発掘区のほぼ中央に位置し、東西約8m、南北約6m、検出面からの深さ約1mを測り、北に開いた馬蹄形をしている。その中に陶磁器や木製品などが隙間なく検出された。出土遺物のうちでは瀬戸・美濃で生産された猪口(1)、碗(2・3・4)、水注(5)、摺鉢、皿(6)、徳利(7・8・9)、常滑の甕などの陶磁器が多数を占めるが、染付の碗・皿など肥前系の陶磁器も見られる。木製品では筥、下駄、柄杓、漆碗など、石製品では硯、砥石など、日常生活用具が大多数である。陶磁器・木製品とも多種にわたっており、当時の豊かな生活がしのばれる。徳利の中には「清洲宿」「二ツ杓」の文字も見られ、清洲宿の存在をより具体化する資料として注目される。陶磁器は18世紀末か

ら19世紀中頃までであり、出土状態から一時期の廃棄と考えられ、良好な一括資料である。

「尾張名所図会」によると、清洲宿は「東海道より美濃路へ通ふ宿駅なれば、旅宿・休茶屋等軒をつらね、町並うるはしく」人々が往来する宿場町としてにぎわっていた。また規模については「当郡及び中島・海東の三郡に互り、十二村合して、町並も数十町あり。」ということである。今回の調査地は同書によると、街道筋の町並と五条川にはさまれた空地または耕作地にあたり、廃棄土坑が造られた目的を考える場合に注意したい。(中野良法)



土坑内遺物出土状況



土坑内出土遺物

朝日遺跡出土の小型仿製鏡

62年1月に出土した小型仿製鏡は、朝日遺跡南居住域の弥生時代後期から古墳時代初頭の包含層から出土した。

鏡径は7.0cm、厚さは0.2~1.1cmを測る。背面構成は、外縁帯→櫛歯文帯→乳及び細線文→鈕となる。外縁帯が断面台形に近い平縁になること、鈕は半球形で、径2.0cmと鏡全体に比べ大きいことから、小型仿製鏡の中でも新しいものと言える。

所属時期は出土包含層中に古墳時代初頭以降の遺物が存在しないことから、弥生時代終末～

古墳時代初頭に属するものと考えられる。

小型仿製鏡の出土は、県内で2例目、東日本全体でも、11例を数えるにすぎない。その希少性は、朝日遺跡の終末期を考えるにあたって重要な視点を提供するものである。

(佐藤公保)



センター日誌

来訪者

- 61・10・31 県立五条高等学校教諭 8名
- 11・1 新城市教育委員会文化財担当 夏目勝雄氏
- 11・12 浜松市文化協会及び博物館 3名
- 11・21 春日小学校郷土クラブ 29名
- 11・26 国立奈良文化財研究所 深澤芳樹氏他1名
- 12・1 春日村村会議員 早瀬正男氏他1名
- 12・5 南知多郷土研究会 山本錠之助氏他19名
 - 〃 幡豆郡三町社会教育委員 大溪紀雄氏他19名
- 12・6 名古屋大学助教授 海津正倫氏他6名
 - 〃 大阪大学助教授 都出比呂志氏
- 12・11 陶芸家 加藤重高氏
- 12・16 東海テレビ事業株式会社社長 北村義朗氏他2名
- 12・17 岡山県古代吉備文化財センター 下沢公明氏他1名
- 62・1・6 碧南市教育長 鳥居 収氏他2名

- 1・10 静岡県教育委員会県史編さん室委員 田辺昭三氏他5名
- 1・26 刈谷市土地区画整理審議会委員及び評価員 酒井 博氏他21名

記録

- 61・10・29 大型方形周溝墓と築遺溝について 県政記者クラブ発表
- 62・1・7 築遺溝木組み部分の取り上げ開始

<現地説明会開催状況>

- 61・11・8 朝日遺跡O区・R区・S区 参加者約 310名
- 12・6 朝日遺跡A区・B区 参加者約 250名

埋蔵文化財愛知 No. 8

発行 昭和62年3月
 編集 財愛知県埋蔵文化財センター
 〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号
 名駅パークビル9F
 TEL 052-586-3155
 印刷 東海プリント